

保健・体育教育（保健）

子どもの育ちを支える養護教諭に求められる専門性

國保いずみ

一 はじめに（基調報告より）

御嶽山の噴火では政府の噴火予測、被害予防は適切だっただろうか。三、一から三年半が経過しても全国二四万人の避難者のことを忘れてはならず、東京オリンピック誘致で問題意識が薄められないようにしっかり見ていかなければならない。

今年の四月から消費税が上がり、経済格差が拡大し貧困が子どもに与える影響が大きくなった。特に北海道の子どもたちの大学進学率は低く、四〇％に留まっている現状がある。

安倍内閣では政治資金不正疑惑により二名が辞職、国政より議員糾弾の国会…。生活と教育に直結する政治の問題を注意深く見る必要がある。

今、学校は授業時数確保と行事の削減で学力向上を謳い、管理と競争で子どもたちを締め付けている。そのため、子どもたちは学ぶ喜び、自己肯定感、安心感、居場所を失い、学校がつまらないところになってしまっている。

私達の仕事の基本は、ありのままの子どもを丸ごと受け止め、その実態をつかむことから始まる。そして今分科会も、さらに子どもへの理解を深め、人間的な関わりを丁寧に支え伴走し励ます保健室実践を、仲間から学び合い深めていきたい。また、問題の背後にある社会情勢をつかみ、運動の方向性と道筋を探り、保健室からの発信力を高め合い、学校づくり、保護者との共同の取り組みを進めていきたい。（旭川東高等学校 高松葉子）

二 実践報告と討議から

1 生徒理解の一助になれば～生徒の言動に学ぶ～

高校教職員センター附属研究所 石郷岡祥子

昨年につき、石郷岡さんの高校養護教諭現職時代の子どもたちとの関わりから、「言葉」をていねいに聞き取り様々なエピソードとしてまとめ、そこからどう子ども理解を深めていくのか考えさせられるレポートであった。

一人ひとりの子に徹底的に関わり、心のひだに寄り添う繊細で暖かなそして真摯で凜とした彼女の姿勢。そこから生まれる安心感や信頼感の中で発せられる子どもたちの「言葉」や言葉にならない「思い」。何気ない言葉も「その問題を背負っていなければ言えない言葉」と、背景を含めその言葉の意味や重さをしっかりと受け止め深く読み解くセンスは、読む者に深く感銘を与えると共に、今私たちが磨きたい教師としての「専門性」を考えさせられるものである。

そのアンテナの感度とも言えるセンスが、現代の生きづらさを抱える子どもの姿をリアルに捉え、援助者として人間的に響き合うエピソードには、子どもの「生きる」を支えるエデュケーターとしての姿がある。

2 電磁波と子どもの健康

札幌青空連絡会 加藤やす子

昨年につき「電磁波」の健康影響についてのレポートである。携帯電話や無線 LAN など無線通信機器の普及と共に出てきた「電磁波」の健康被害の問題は、現代の新しい環境問題である。

「電磁波過敏症」は、有症者の訴えを元に世界的にも少しずつ認知されつつあるが、日本ではまだあまり進んでいない。

今回は「電磁波」の問題についての世界的な動向、健康被害の状況、診断できる医療機関、今できる予防と対策など新しい情報として学ぶものが多かった。

今や電波環境は、私たちの生活の中では欠かせなくなっているものであり、特に学校では ICT 教育が盛んに進められているが、これからも文字通りアンテナを高くして、保健室の立場から電磁波による健康被害についての情報発信とこれを視野に入れた健康管理をしていかなければならない。

そして社会的にも、開発に伴うリスクマネジメントととして、電波防護指針と電磁波暴露対策について関心を寄せていく必要がある。

3 フッ素は危険

札幌青空連絡会 佐藤利恵

「フッ素洗口」の問題は、日本では昭和四十年代からある問題であるが、平成二十一年の北海道の条例により各学校で実施を推奨されるようになって、改めて直面する問題になっている。(今は全国的に広まってきている)

この問題は、「フッ素そのものの安全性」の賛否が大きく問われる中で、更に「学校が、学校で(一斉)実施することの問題性」等あるが、飽くまで「予防原則」と「学校の主体性」の立場にたって情報を共有し合い、今後のフッ素塗布(洗口)事業の動向を注視していかなければならないことを確認した。

4 いつも、そばにいるよ…

厚沢部町立館小学校 笹谷亜紀子

いよいよ今年卒業を迎える摂食障害を抱えながら成長した A ちゃんに入学当初から寄り添い、保護者や担任をも支える関係を作りながら、じっくり丁寧に育ちを支える養護教諭の仕事の原点とも言うべき実践の報告である。

笹谷さんのレポートには、いつも(これまでのレポートにも)彼女自身の持つ温かい人間性が溢れている。

その上で、子どもの体を科学的にも経年的にも専門的な見方も含めトータルに見る視点や、深い子ども理解、子どもや親の立場に立ちきる姿勢、そして子どもの成長発達への信頼と希望に根ざした彼女の関わり方や思いは、深い感銘を覚えると共にたくさんの学びを得ることができた。

またそれは、同僚の中でも共有され「学校づくり」をも形作ってきたことを窺い知ることができる。笹谷さんが綴る A ちゃんの物語には、養護教諭や担任の関わり、学校のあり方として、神髄となる言葉がたくさんちりばめられている。

5 保健室登校ってなんだろう？

浜頓別中学校 木村乃梨恵

不登校でもなく別室登校でもない、ただ保健室の頻回利用から次第に保健室で過ごす時間が長くなり教室に行けなくなった生徒が、結果的に「保健室登校」状態(始まりやきっかけがはっきりしない)になったことから、その状態を職員全体としてどのように共有

化を図り、支援も含めどのように体制作りができるのか、模索と課題提起のレポートである。

そこには、保健室での様子を発信して全体で共有しよう、子どもをしっかり受け止め支えよう、発達課題や発達要求を全体のものにして対応できる組織体制を作ろう等、木村さんの苦悩と挑戦が現れている。その中で特に「学習保障」について、適正に支援ができないと、「この学習への不安が更に教室へ行きたくてもいけない状態を作り、二次的に不登校や保健室登校を悪化させる」という学校体制における重大な課題意識を持っている。

ともすると保健室だけの対応に陥りやすい「保健室登校」の中でもこのような(特殊な?)ケースに、フロアからもたくさんの質問・意見が出され熱い議論が交わされた。そして、木村さんの捉えた子どもの発達課題や発達要求にしっかり対応する視点や方向性、それに対応する学校体制における課題意識や前向きな働きかけなど若い木村さんのがんばりを励ます話し合いになった。

6 生徒のニーズに合った「性の健康教育」を目指して

K 中学校 ○山○子

思春期の中にある子どもたちにとって、「性」は大きな発達課題である。取り分け発達障害などを抱えている生徒にとってのそれは重要なテーマであることに着目し、「性の健康教育」に取り組んだ実践レポートである。

まず子どもの体の成長と生活の実態から、その子固有の課題と発達のニーズを分析し、担任教師と連携を図りながらタイミングを逃さずに指導を組み立てるという○山さんの実践力に驚かされる。

そこには、発達障害を抱える生徒が将来「性」の被害と加害の両方に巻き込まれないようにという切なる願いがある。

発達障害を抱える生徒を含む全体指導の上に、更に個に応じたSST（ソーシャルスキルトレーニング）の大切さが確認され、またその方策について様々な事例や関係機関からの情報なども含め共有され活発な意見交換ができた。

7 高校での感染症対策

～胃腸炎集団感染の対応の失敗から考える～

白老東高等学校 阿部佳苗

本レポートは、今年六月、ノロウイルスを含む感染性胃腸炎の町内的な流行から、学校での終息まで三週間以上にわたり起きた集団感染についてまとめられたものである。

多い日で早退者二十六名をはじめ不調を訴える子どもたちへの対応をしながら、学校医や保健所、教育委員会など外部機関との連絡や対応、学校全体での組織的対応など、レポートには、①担任による健康調査、②学校保健会の開催、③校内清掃・塩素消毒、④上靴の消毒、⑤検便、⑥保健所提出書類の項目で、経過の中で発生する膨大な対応事項について整理されまとめられている。今、世界的にも感染症の脅威が叫ばれる時代でもある。それらも含め改めて危機管理意識を高め、今一度不測の事態を想定し対処できる体制を整備しておかなければならない。この経験と教訓の共有から、実践的に学び合う価値は大きい。

8 想定外の事例に出会って

友達数人と「心霊スポット」に行った生徒が体に不調を起こし、翌日になって学校でも再び同じような症状に見舞われると共に、学校中が騒然となった想定外の事案に対応した報告である。

このような一種の不安障害のような事例やそれによる集団ヒステリーなどは、事の大小こそあれ学校では昔から存在することが言われている(こっくりさん・催眠術ごっこなど)。フロアからも、色々な事例が出されていた。

まだ科学で証明されるに至っていない不思議な現象もあるがこれらの事例も想定に入れながら、子どもの体におきている状況を冷静に判断し対応することの大切さが確認された。

三 まとめ

今年は、小学校から一本、中学校二本、高校二本、そしてその他の機関・団体から三本と、計八本のレポートが出された。

子どもたちの取り巻く環境は、保健衛生的にも社会的にも大きく変わってきている。その意味に於いてどのテーマも今日的であり、基本的な養護教諭の仕事の専門性と共に、今の時代を生きる子どもの「生活認識」「自己認識」を洞察する子ども理解を今一度深く考えさせられる報告と提起であった。

また、その視点や姿勢・感性や関わり方などは、周りの教師の教師魂を揺さぶると共に、「管理」と「競争」の教育政策が進められる中で、子どもの成長発達を豊かに保障する学校の砦として、学校作りの重要な要にもなっていることだろう。

これからも、子どもを通してその背後にある社会を見る目を研ぎ

澄まし、そして養護教諭としての専門性を磨きながら、子どもたちに寄り添い成長発達を支えていきたい。そして主権者である子どもの代弁者として、学校づくりや社会づくりに向けて保健室から発信していきたい。

合研の参加については、何も大きく取り組んだレポートでなくて日々の小さな実践でもレポートなしでもいい。ここに参加して互いに語り合うことの意義や学びはとても大きいと思う。

来年は、たくさんの参加者で、更に活発な討議ができることを願っている。